慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	韓国SFのジャンル的特徴とその意味 : 近代化のプロパガンダからポストヒューマニズムまで
Sub Title	Korean science fiction as a genre : from propaganda for modernization to posthumanism
Author	李, 知容(Lee, Ji-Yong) 金, 景彩(Kim, Kyongche)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.57 (2025.) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20251231-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

韓国SFのジャンル的特徴とその意味 ——近代化のプロパガンダから ポストヒューマニズムまで——*

李　知容　著[1)]
金　景彩　訳

1. SF の定義を韓国 SF に適用するという問題

SF（Science Fiction）を定義することは極めて困難である。この一世紀のあいだに，科学技術のあり方と射程が飛躍的に発展・拡張し，人間存在への影響力が変化したのと同様に，近代科学の誕生以後に成立したジャンルである SF も，科学技術とともにこれまで大きな変化を遂げた。ゆえにデイヴィッド・シード（David Seed）は，SF を一個のジャンルとして規定するのは現代にふさわしくなく，むしろ多様なサブジャンルが相互に交流する様式や領域として理解するのが適切だと論じた（Seed 2011：1–2）。アンディ・ソーヤー（Andy Sawyer）とピーター・ライト（Peter Wright）が指摘したように，文化・イデオロギーの変化に想像力をもって応答し，自らの変革を志向するということは，まさに SF というジャンルの重要な特徴である（Sawyer & Wright 2011：1）。

ジャンルの定義をめぐるこのような変化には，1960 年代にイギリスで始まった「ニューウェーヴ」が大きな影響を与えた。ニューウェーヴは，アメリカにおいて雑誌メディアを中心に展開された SF のあり方を批判し，SF を通じた現実認識の重要性を強調する形で発展された。

---

* 本稿は，2019 年に韓国で発表された論文「한국 SF의 장르적 특징과 의의——근대화에 대한 프로파간다부터 포스트휴먼 담론까지〔韓国SFのジャンル的特徴とその意味——近代化のプロパガンダからポストヒューマンまで〕」（『대중서사연구〔大衆叙事研究〕』第 50 号，대중서사학회，2019，pp. 33–69）を大幅に修正・加筆したものである。

1) 韓国檀国大学校グローバル K-カルチャー人文社会融合人材事業団研究教授，SF 研究者，文化批評家。著書に『韓国SFジャンルの形成〔한국 SF 장르의 형성〕』（ソウル：커뮤니케이션북스，2016）があり，共著に『韓国創作SFのほぼすべて〔한국 창작 SF의 거의 모든 것〕』（ソウル：케포이북스，2016），『非主流宣言〔비주류선언〕』（ソウル：요다，2019），『優しい身体・見慣れぬ身体・奇妙な身体〔착한 몸，이상한 몸，낯선 몸〕』（ソウル：몸문화연구소，2019）などがある。

その結果 SF は，もっぱら自然科学を対象とした従来の物語から離れ，歴史や哲学，社会学などの諸領域の理論を積極的に取り入れ，いわば思考実験を行う思弁的な物語へと拡張し始めた。19 世紀までの SF のキャノンを通じて確立されたこのような SF のあり方は，20 世紀のアメリカを中心に形成された SF の限界を超えて，SF ジャンルにおける新たな題材や主題意識，世界観の誕生を可能にした。その結果，SF が有するジャンルとしての射程が大きく広げられることとなった。

韓国において SF がどのようなジャンルであるかを論じようとすると，より複雑な問題が生じる。SF ジャンルの定義が形成されたアメリカを中心にその変化の様相を辿ると，いわゆる雑誌時代に雑誌連載小説という形で始まり，その後単行本の時代へと移行，そこからラジオドラマ，テレビドラマ，映画などへとメディアのヘゲモニーが転換する中で，ジャンルを構成する要素も時代とメディアに沿って段階的に変化したことがわかる。社会との影響関係でいうと，1950 年代の冷戦のナラティブや，それを克服しようとしたカウンター・カルチャー，1960 年代の宇宙開発競争時代の言説，1980 年代のサイバーパンク言説といった，それぞれの時代を象徴する要素が SF ジャンルから容易に確認でき，それに関する研究も体系的に進められてきた（Bould&Vint 2011）。

要するに，SF ジャンルにおいては，時代ごと，媒体ごとに大衆の嗜好が繰り返し蓄積されることでエピゴーネン（epigonen）が形成され，それがジャンルを規定する形式的な枠組みとして強固に定着した。その過程で確立された「メガテクスト（mega text）」[2] という概念は，現代の SF ジャンルを規定する際の最も重要な要素となった。しかし韓国の場合，そのようなジャンルの形式と内容をそのまま踏襲することはできなかった。

韓国における SF ジャンルは，その登場以来，社会的・歴史的要因に強く規定され，長らく限定的な形に留まっていた。韓国 SF 独自のジャンル的慣習が形成されるのは，新たなテクノロジーの台頭により，ジャンルに新たな可能性が開かれた 20 世紀末以降のことである。したがって，韓国 SF を定義し，理解するにあたっては，まず 20 世紀初頭のジャンル黎明期における歴史的文脈と，その後ジャンルの形成に関与した社会的要因を検討する必要がある。

2. 韓国 SF のジャンル的意味と特徴

2.1. 近代化のプロパガンダ

韓国 SF は，長いあいだ近代化のプロパガンダとして翻訳・翻案・創作された。この特徴は，

2） 訳注：SFというジャンルを可能にする共通の設定，モティーフ，コードの集合を指す概念である。個々の作品を超えて，作家と読者が暗黙のうちに共有してきた「宇宙旅行」「タイムマシン」「ロボット」「ディストピア都市」などの反復的要素の総体を意味する。SFの創作と受容は，こうしたメガテクストという巨大な相互テクスト性の場の中で展開される。

SF ジャンルの黎明期から植民地解放を経て，1970 年代に出版社アイディア会館による SF 全集が刊行されるまでの時期に発表された作品群に見出される。しかし，この 70 年間には細部において少しずつ変化が生じていたことが確認できる。その変化を三つに分類すると，1 つ目は科学によって近代化を成し遂げた祖国の希望的未来に関する青写真，2 つ目はイデオロギーといわゆる大きな物語に対するプロパガンダ，3 つ目は科学への好奇心を喚起し児童・青少年を啓蒙するためのツール，である。

祖国の希望的未来に関する青写真は，初期SF作品に最も顕著に見られる特徴である[3]。それは朝鮮で最初に紹介されたジュール・ヴェルヌ（Jules Verne）の『海底二万里』の翻案過程において確認できる。『海底二万里』は朝鮮では「海底旅行奇談」というタイトルで翻案された。『太極学報』[4] 第 8 号から連載が始まり，三度の休載を挟みつつ第 21 号まで，計 11 回にわたり掲載された。ところが，第 2 回の連載分に，原作には存在しない以下の一節が見られる[5]。その一節は『フィリピの信徒への手紙』を引用したもので，弱小国であってもいずれ強大国となりうるという希望を込めた内容であった。そして，その希望を現実にできるのは西洋の技術文明であると信じられていた。

ジャーナリスト兼小説家であったイ・ヘジョ〔李海朝〕[6] が，ジュール・ヴェルヌの『インド王妃の遺産』を翻案した『鉄世界』（1908）において，原作に登場する 2 つの都市「フランス市」と「シュタールシュタット」のうち，「シュタールシュタット」に関する内容のみを取り上げている点からも，近代化プロパガンダとしての SF の特徴は明らかである。原作において「フランス市」は，現代的に言えば福祉制度が充実し，医療技術が発達した都市であり，「シュタールシュタット」は機械化と自動化の進んだ都市であった。ヴェルヌはとりわけ，この 2 つの都市の対比を政治的・歴史的アレゴリーとして描き，「シュタールシュタット」に内在する技術万能主義の弊害や全体主義の危険性を警告しようとした。しかし，それを朝鮮で翻案した李海朝は，「フランス市」の理想像よりも，技術文明によって強力な軍事力を築き，驚くべき変貌を遂げた「シュタールシュタット」の姿のみを描写した。当時の知識人たちが SF を通じて大衆を啓蒙することで何を志向していたのかは，このような翻案の事例からも明らか

3） これは，東アジアにSFが伝来した際に共通して現れた現象である。日本の明治維新などに見られるように，東アジアにおける近代化の過程において科学技術は，人文学と並んで西洋を理解するための一つの方法論であり，また西洋そのものの象徴でもあったため，それを理解しようとする努力が共通して見られる（チョ・ヒョンレ 2014：74）。

4） 訳注：1905 年，東京で結成された朝鮮人留学生団体「太極学会」の学会誌である。

5） その一節は次の通りである。「「救主最히弱者에더옥同情을表신다」님의말삼에依야將來에極樂의天堂과最强의國을得리라〔「最も弱き者を憐れまれる」という神の御言葉によって，将来，極楽と最強の国を得るであろう〕（朴容喜「海底旅行記譚」『太極學報』第 9 号，大極学会，1967，p. 48）。

6） 以下，植民地期の朝鮮および植民地解放後の韓国における人物名については，漢字表記が確認できる場合には漢字名を併記する。

である。

祖国の希望的未来を描くにあたって，西洋の近代学問，とりわけ数学や物理学が強調されていた点も特徴的である。例えば，シン・テアク〔申泰岳〕がジュール・ヴェルヌの『地球から月へ』（1865）を翻訳した『月世界旅行』（1924）においては，宇宙に対する幻想的な想像力よりも，そこへ到達するための巨大な大砲に関する情報が，物理学・天文学・生物学の知識の強調とともに説明される。これは，当時のSFテクストが「植民地朝鮮の知識社会とその内部の読者にとって，先進的な文物であり，有意味な読み物」（キム・ミヨン 2022：364）であったことを示している。しかしながら，当時のSFテクストが単に西洋の学問や技術に対するプロパガンダとしてのみ存在したわけではない。政治的イデオロギーの側面もまた，植民地朝鮮で生産されたSFテクストに一貫して見出される特徴であった。

その始まりは，ユートピアという理想郷を描いたエドワード・ベラミー（Edward Bellamy）の *Looking Backward*：*2000–1887*〔顧みれば〕（1888）を改作した鄭然圭の『理想村』（1921）にさかのぼるが，明確な意図をもって発表された作品としては，社会主義者パク・ヨンヒ〔朴英熙〕がカレル・チャペック（Karel Čapek）の戯曲『*Rossumovi univerzální roboti*』〔ロッサム万能ロボット会社〕（1920）を翻案し，『開闢』誌に紹介した「人造労働者」（1924）を挙げることができる。朴英熙はこの作品を，徹底してプロレタリアと労働の問題へと還元して翻案した[7]。原作において受動的かつ感情的に描かれていたヘレナを，労働の価値を理解し，ロボット解放のために闘う人物へと改変した点がその典型である（ハン・ミンジュ 2012：417–449）。朴英熙は，労働の価値と労働者の解放をめぐる社会主義的イデオロギーのナラティブとして，SFを積極的に活用したのである。

植民地解放と戦争を経て，分断国家という特徴をもつ韓国において，特定のイデオロギーを宣伝するプロパガンダ的要素は，ある意味で必然的なものであった。1987年に歴史改変小説『京城・昭和六十二年 碑銘を求めて』を発表し，自作をSFジャンルに属するものと明言することで，韓国文壇においてSFジャンルが注目される契機を提供したポク・コイル〔卜鉅一〕も，プロパガンダとしてのSFという嫌疑から自由ではなかった[8]。卜鉅一は，続く『歴史の中

7） 無論，当時『*Rossumovi univerzální roboti*』を，労働問題から読解することは決して特別なことではなかった。日本で同作品の上演を鑑賞した金祐鎮も「資本主義と軍国主義に対する否認，母性の高唱，労働の神性」（「築地小劇場에서 人造人間을 보고〔築地小劇場で人造人間を観て〕」『開闢』第72号，1926）と評した。

8） 韓国において「SF」あるいは「科学小説」という名称が最初に用いられたのは，ジュール・ヴェルヌの*Les Cinq Cents Millions de la Begum*（1879）を李海朝が翻案し紹介した『鉄世界』（1908）であるとされる。同作品の表紙には「科学小説」と明記されており，その後に紹介された『飛行船』（1912）においても「科学小説」という名称が確認できる。ただ，SFがジャンルとして確立されるのが，ヒューゴー・ガーンズバックがアメリカでもたらした雑誌の時代以降であるとするならば，当時の朝鮮において「科学小説」という語は，まだジャンル的な意味を獲得していなかったと考えるべきである。SF

の旅人』（1991）や『青い月の下で』（1992）において，南北対立を主題化し，その中で韓国のイデオロギー的・体制的優越性を露骨に強調した[9)]。

最後に，科学への好奇心を喚起し，児童・青少年を啓蒙するためのツールとしてのSFは，ハン・ナグォン〔韓楽源〕の作品群をはじめ，1970年代まで刊行されたアイディア会館の全集類において顕著にみられる。児童文学である以上，当然そのような要素を含むと考えられるが，初期から1980年代に至るまで韓国で創作されたSFテクストの大半が児童文学であったことを踏まえると，児童・青少年の啓蒙という目的意識を韓国SFの特徴として位置づけることが可能であろう。とりわけ初期児童文学におけるSF的要素は，「科学する」子どもや少年を登場させ，科学への好奇心を喚起しようとする点に特徴があった。韓楽源の作品において少年が繰り返し登場し，未来の指導者として描かれたことからも，児童・青少年を啓蒙しようとする意図を読み取ることができる。

しかし，啓蒙のツールとしてのSFには明確な限界があった。すなわち，科学技術に関する知識や情報を過度に意識し，小説としての物語構造を単純化してしまった点である。とりわけアイディア会館の『韓国科学小説全集』に収められた韓国SF作家クラブの創作作品はその典型である。ソ・グァンウン〔徐光云〕の『北極星の証言』（アイディア会館，1975）には，科学知識や学習すべき情報を単に列挙するに留まる傾向が認められる[10)]。さらに，科学技術に対する過度の楽観主義は，倫理的問題を内包すると同時に，SFが本来，技術文明に対する批判的認識から発展してきたという文脈を覆い隠してしまった。特定の政治的・社会的目的のためにSFが創作・消費されることによって，ジャンルが本来的に有する多様な可能性や方法論が大きく制約されていたのである。これは，近代朝鮮にSFが初めて登場して以来，一貫して抱え続けてきた限界であったと言える。

2.2. ナショナリズムと現地化の間

韓国においてSFジャンルは，特定の政治的・社会的目的から切り離されて初めて，独自のジャンルとして確立し得る可能性が開かれた。とりわけパソコン通信という新たな文化的空間

がアメリカにおいてジャンルとして確立された後に，韓国で「SF」あるいは「科学小説」という語が言及されるのは，児童文学や，1970年代にアイデア会館から刊行されたSF全集類を通じてであり，さらにSFジャンルに対する明確な認識を有し，自らの作品をSFと名付けた最初の事例は，卜鉅一である。

9) とりわけ『青い月の下で』において浮き彫りになる特徴である。アメリカに代表される科学技術の洗礼を受けた南半球と，そうではない北半球の対比を通じて，「南」の優位を描いている（イ・ジヨン 2015：87–91）。

10) このような特徴は，『北極星の証言』の主に二箇所で確認できる。数学の素数概念についてまるで参考書のように解説している箇所（p. 37）と，生物学者・禹長春の業績を羅列する箇所（p. 14）である。これらの箇所において，作品の中心的内容とは直接関わりのない内容が，必要以上に長く，詳しく述べられていることが確認できる。

の出現は，SF が大きな物語や社会的要請から自由になりうる余地を与えた[11]。この時期に創作を行った作家たちは，翻訳されたものではなく，外国語の原文で SF 作品を読み，同人会などで自ら作品を翻訳し，それを共有するといった経験を積んでいたため，ジャンルの慣習やコードに精通していた。また，1970 ～ 80 年代に映画やドラマを通じて世界的に紹介された SF 作品は，韓国産の創作 SF がまだ可視化されていなかった時代においても，大衆が SF ジャンルを理解する手がかりとなった。

当時，韓国 SF が直面していた最大の課題は「現地化（localization）」であった。ジャンルが特定の社会に根付くためには現地化の過程が不可欠だが，その際にしばしば問題となったのがナショナリズムである。「韓国的なもの」を作中に取り込むことで SF ジャンルの現地化を図った試みが，しばしば民族・国家に対する過度な強調につながってしまったのである。この傾向は，イ・ソンスの『アトランティス狂詩曲』（1991），『ウーマン Q』（1991），『ウイルス壬辰倭乱』（1992），『スフィンクスの呪い』（1993）などに典型的に表れている。こうした課題に対して新たな可能性を提示したのは，デュナ（DJUNA）である[12]。

デュナの作品は，SF における空間・登場人物・題材の現地化を本格的に試みた。しかし，そこには韓国の「伝統」やナショナリズムに訴える要素は一切見られない。代表作『代理戦』（2006）は，その特徴を如実に示す作品である。作中では惑星間旅行を楽しむ異星人たちが登場するが，彼らの活動舞台はアメリカのマンハッタンやヨーロッパ諸地域ではなく，韓国の富川（プチョン）である。背景をこのように設定することで，従来の SF における異星人のあり方や彼らによって引き起こされる事件の様相は，富川という地域性によって変形され，独特な形で再現される。これは，デュナの作品が，SF が本来的に有する多様な要素を効果的に内在化し，単なる模倣的受容に留まらず，変形的受容（transformative reception）の段階へと移行していたことを示す[13]。個性を欠いた衛星都市としての富川は韓国特有の背景であると同時に，韓国社会

11） この時期，パソコン通信サービス上では，さまざまはSF関連同好会が作られ，活発な活動を展開していた。例えば，チョンリアン〔千里眼〕の「すばらしい新世界」，Hi-Telの「科学小説同好会」，Nownuriの「SF2019」，Unitelの「SF Odyssey」が代表的な例である（イ・ジヨン 2015：81）。

12） 韓国SFを代表するデュナ（DJUNA）は，1994 年に Hi-Tel というパソコン通信サービスの掲示板にて「ミメーシス」，「時間をさかのぼった蝶」，「時間旅行者の虚しい終末」のような作品を投稿し，作家として活動を始めた。デュナは，SFのジャンル的慣習とコードを完璧に近いほど内在化し，「ジャンルのクリシェ（cliché）から進化を遂げた突然変異的な文化生産物，その進化プロセスに対するアレゴリー」として評価された（ポク・ドフン 2008：59）。

13） これについてデュナは次のように説明する。「舞台を富川にしたのには二つの理由があります。まず，私がある程度地理を知っている場所だからです。そして，多くの首都圏の衛星都市がそうであるように，比較的無個性的なんです。登場する具体的な場所も，現代百貨店やホームプラスのような，どこにでもあるものですしね。国会議事堂がある汝矣島よりも，他の場所にあるものしかない，退屈で没個性的な衛星都市のほうが物語には合っていると思ったんです。」著者インテビュー，『이대 대학

が近代化以来一貫して志向してきた価値体系がたどり着いたところを凝縮して見せる場所でもある。そのような空間をねじり，宇宙連合に属する異星人たちの覇権争いの場とした点は，SF が韓国においてどのように変容しうるかを実験的に示した。デュナは，幻想的な空間を現実に実在する空間に重ね合わせることで，そこに新たな意味を付与したのである。

幻想的空間と現実空間を重ね合わせる手法自体は他の SF 作品にも見られるが，デュナはそれを韓国という具体的な場において試み，そこから新たな意味の創出を目指した。同じ手法であっても，それが用いられる時代や地域によって差異が生じるのは当然である。とりわけ，幻想的空間を現実空間の具体性に立脚して築き上げることは，現実の背後に潜むものへの認識を促し，現実そのものに対する新たな洞察を可能にする。キャスリーン・ヒューム（Kathryn Hume）が論じたように，幻想的空間や背景は「冒険を可能にし，主人公たちに，現実世界では決して実行できず，また実行されなかった行為をさせる」契機となる（Hume 1984 = Trans. by ハン・チャンヨプ 2000：260）。SF のナラティブが描く幻想的空間を通じて受容者は，馴染んだ現実空間に対する逸脱的体験を享受することになる。そしてその逸脱の対象には，これまで問いに付すことができなかった近代的価値体系も含まれる。リアリズム美学に適合する価値のみが重視されてきた韓国において，SF が現地化の過程で示した逸脱と転覆は，近代以降にいかなる新たなナラティブが可能であるかを問う，一種の思考実験として位置付けられる。

SF ジャンルの現地化は，SF が本来的に有する幻想性を考えるうえでも重要な課題である。ファンタジー作家の C・S・ルイス（C. S. Lewis）が「漠然と描かれるか，あるいは明確に想像できない場面や特徴は，主題を不明瞭にし，読者の関心を弱めてしまう」（Lewis 1966：61）と論じたように，SF の現地化は単にナショナル／ローカルなジャンルを確立するためではない。むしろ，漠然と描かれ，明確に想像できないものによって，物語に対する読者の理解や共感を妨げられる事態を解決するために不可欠な作業である。デュナが作品に登場する架空の空間を現実に存在する日常的空間に立脚して構築しようとしたのもそのためである。そうして韓国 SF は明確なイメージを獲得し，固有の個別性を得る道を切り開いたのである。

韓国 SF はデュナを経て，ようやく韓国独自のジャンル的意味を獲得し，その意味にふさわしい作品を有するに至った。その後，いわゆる純文学の領域においても，パク・ミンギュ〔朴玟奎〕をはじめ，SF 的想像力や世界観を理解し，それを積極的に取り入れる作家が現れ始めた。さらに，ペ・ミョンフン〔裵明勳〕やチョン・セランのように，2000 年代以降「ジャンル文学」[14] としての SF から創作活動を開始し，やがて純文学の領域でも注目される作家も登場した。しかしそれにもかかわらず，アカデミズムや純文学が主導する韓国文壇において，彼らのテクストを SF として定義し，理解しようとする試みは依然として多くなかった。SF はなおも「西

원 신문』，第 52 号（http://www.kyosu.net/news/quickViewArticleView.html?idxno=10343）。

14) 訳注：従来「純文学」に属しないとされてきた，大衆的な文学作品を括って指す概念。SF 小説，ロマンス小説，探偵小説などの大衆小説ジャンルがこれに属する。

洋のもの」とされ，韓国文学においては存在しないかのように扱われ続けたのである。

だが，このような認識もインターネットの普及とともに変化する。サイバースペースが拡張し，日常化していく現実において，その空間を通じて誕生し流通するようになった一連の作品群は，急速に変化する世界に対し，前衛的かつ進歩的な問いを投げかけることで，SF ジャンル本来の姿を体現するようになったのである。

2.3. 科学的想像力とポストヒューマン

21 世紀に入り，インターネットの普及とデバイスの進化によって，サイバースペースの可能性は大きく広がった。韓国における最も代表的な事例はウェブジン（Webzine）である。その中でも，「幻想文学ウェブジン」を標榜して登場した『鏡〔거울〕』は特筆すべき存在である。『鏡』は，それ以前の同好会や各種ウェブページに比して，多様な側面にわたり活動を展開した。すなわち，オンラインで発表された作品を選定しアンソロジー形式で刊行すると同時に，批評集の出版も行ったのである。こうした試みが可能であったのは，パソコン通信時代から SF 関連の同好会に属していた人々や，すでに創作活動を行っていた作家たち，さらには 2000 年代半ばに再編された「科学技術創作文芸」を通じてデビューした新人作家たちが活動主体を担っていたからである。

『鏡』を通じて登場した作家や作品は，韓国 SF の特性を如実に示すものであった。とりわけ注目すべきは，テーマおよび SF のサブジャンルにおいて，多様な実験的試みが行われた点である。SF は本来，技術によって構築され変容する現実に対して批判的観点を堅持するジャンルである。科学と技術の万能主義が孕む危険性を警告する一方で，環境と人間，動物と非人間的存在，人種やジェンダーに関わる価値体系に対して思考実験を行う場であったのである。さらに SF は，科学技術がもたらし得る人類滅亡の可能性を指摘するとともに，1960 年代後半のアメリカにおけるフェミニズム運動と密接に結びつき，その言説の形成と拡張に寄与してきた。その後は，多様化する身体や存在をめぐる言説と並行して思考実験を展開し，やがてポストヒューマニズム言説の枠組みに位置づけられるジャンルへと発展していった。こうした SF ジャンルの特性と方法論が，韓国の作家たちにおいて積極的に実践され始めたのは，まさに Webzine の登場期であった。

まず，科学的想像力の再現に取り組み，SF 的想像力が単なるマニア的記号に還元され得るものではないことを示したのが，ペ・ミョンフンの作品である。彼の代表作とされる『タワー〔타워〕』（2009）は，674 階建ての超高層タワーに築かれた国家「ビーンスターク」を舞台に，当時の時代状況を赤裸々に映し出した。その後も彼は，宇宙を舞台とする物語を，幻想的な空想ではなく日常と地続きの空間として描き出すことで，SF の普及に寄与した[15]。ペ・ミョンフ

15） ペ・ミョンフンの作品『こんにちは，人工存在！』（2010）ではこのような設定が全面的に打ち出

ンと同じく「科学技術創作文芸」の受賞者であり，パソコン通信時代から創作を行い翻訳活動も手がけてきたキム・チャンギュの「我々が追放された世界〔우리가 추방된 세계〕」(2016) は，シミュレーション仮説のような概念を用いて，我々が生きる世界と人間存在そのものを問い直した。彼の作品もまた，SF ジャンルが単なる慣習的想像力に限定されないことを示す事例であると言える（コ・ジャンウォン 2017：484–485)。

シミュレーション仮説のような概念は，哲学者ニック・ボストロム（Nick Bostrom）が特に重視し，好んで取り上げるものであり，多くの SF 小説においてすでに扱われてきた。しかし，それが広く認知されるようになったのは，『マトリックス』シリーズ（1999–2003）を通じてである。このような概念的装置を用いることで SF は，科学技術の変化によって想像可能な領域を仮定し，そこに現実を導入することによって主題を構築していく。科学技術の変化が人間認識や思考形態，さらには行動様式にまで影響を及ぼす現代において，この方法論は単に想像力による未来像を提示するのではなく，現実を転覆的に思考し，代案的未来を構想する契機として位置づけられる。「我々が追放された世界」がセウォル号事件とその社会的衝撃を背景に創作され，そこに関連するメッセージが込められたのも，まさにこうしたジャンル的特徴に根ざすものと解釈できる[16]。

この時期の SF にみられるもう一つの特徴は，〈ポストヒューマン（post-human)〉をめぐる言説が本格化した点である。ポストヒューマンは，1960 年代に台頭したポスト構造主義の脱中心的・脱イデオロギー的な言説がポストモダニズムの潮流と結びつき，人文芸術分野に広く浸透する形で最初に登場したとされる。しかし，ポスト構造主義から派生した認識論的枠組みが〈ポストヒューマニズム（posthumanism)〉として具体化したのは，それが科学技術の発展と結びついた時点である。ポストヒューマンの概念を定義しようとする理論が技術工学に依拠している事実も，理論と科学技術の相互連動を傍証する[17]。とりわけ 20 世紀末以降に加速した科学技術の発展は，技術を単に人間生活を補助する外在的対象から，人間そのものと融合し相互に干渉する装置へと，その位相を転換させた。

されている。とりわけ表題作「こんにちは，人工存在！」においては，宇宙へ出ることに特別な意味を見出さない人物や職業が描かれている。彼らにとって宇宙は冒険の場でも未知の領域でもなく，そこで直面する悩みは，我々が地球上で日常的に抱えるものと大差ない様相を示している（ペ・ミョンフン 2010：117–118)。

16) キム・チャンギュはインタビューで，「セウォル号の悲劇が残したメッセージは，世界がどうなろうとも最後まで守らなければならないのは子どもたちだという点であり，そこに焦点を当てて書いた」と説明した（キム・ジヨン「‘SF어워드’ 중단편소설 대상 김창규씨 “SF소설 핵심，기술 아닌 삶의 변화”」『서울경제』2016 年 12 月 26 日)。

17) ポストヒューマニズムの理論家であるマックス・モアは，ポストヒューマンを定義するにあたり，「工学技術を私たち自身に適用することによって，もはや（従来の）ヒューマンとは言えない何か，すなわちポストヒューマンになることができる」と述べた（More & Vita-More 2013：4)。

したがって，現代のポストヒューマンを「人間能力の向上および強化に関連する科学技術の発展と，ポストモダニズムに代表される現代哲学の台頭に思想的基盤を置いている」と論じることは，これまでの流れを反映した通論と位置づけられる（イム・ソグォン 2013：62-63）。技術発展に伴う境界の解体と再構築は，「身体をもつ存在，コンピュータ・シミュレーション，サイバネティクスメカニズム，生物学的有機体，ロボットの存在目的と，人間がもつ目標意識のあいだに，本質的な差異や絶対的境界は存在しない」領域へと展開している（Hayles 1999 = Trans. by ホ・ジン 2013：24）。そしてこのようなポストヒューマンの概念は，これまで SF が一貫して探究してきた主題である。SF ジャンルの嚆矢とされるメアリー・シェリー（Mary Shelley）の『フランケンシュタイン（Frankenstein）』（1818）以来のテーマであり，朝鮮で初期に紹介されたチャペックの『Rossumovi univerzální roboti』もまた，ポストヒューマンの文脈から論じることができるのである。

近年，韓国におけるポストヒューマン論は，大きく二つの流れに分かれて展開されている。一つは非人間的存在に対する省察であり，もう一つはジェンダーをめぐる思考実験である。とりわけ非人間的存在に対する省察は，前述した通り，SF において長らく主題化されてきた。異星人やロボットといった現生人類以外の存在をキャラクター化して描く SF は，その社会が他者をどのように認識しているかという無意識を投影するとともに，内在化された偏見を可視化する役割を果たす。小説家キム・タクァン〔金琸桓〕と科学者チョン・ジェスン（鄭在勝）の『盲いた時計職人〔눈먼 시계공〕』（2010）はこの点を明確に扱っている。ロボットによる人間身体の置換が日常化した世界において，「人間」とは何かを定義することは，根本的に新たな認識形態を不可欠とする[18]。かつて人間の存在を規定していた様々な価値は，それが解体され再定義される過程において，現実の偏見や不条理を改めて照射することになる。非人間をめぐる言説は，AI に関する社会的想像力が本格化するにつれて一層加速した。身体を持たないが人間と交流できる AI と，拡張されたシミュラークル（simulacre），広範なサイバースペースに生きる現実の人類の間に，もはや大きな差異は存在しないからである。

チョン・ソンラン『ある物質の愛』(2020)，キム・チョヨプの『地球の果ての温室で』(2021)，チェ・イテクの『シュレーディンガーの子どもたち』（2021）のように，2015 年以降にデビューした作家たちの作品では，データ化された身体や空間，ポストヒューマン的存在は対立や問題の原因とはならない。むしろそれらは日常的なものとして登場し，共存のあり方がためらいなく描かれている。ポストヒューマン的存在はもはや遠い未来の幻想的存在ではなく，日常の

18）『盲いた時計職人〔눈먼 시계공〕』の場合，人間とサイボーグを区分する問題について次のように論じている。「サイボーグとは，身体の一部でも機械に置き換えられた存在を指す。ある者は，自らの身体のわずか 3%が機械であっても自分をサイボーグとみなし，ある者は身体の 70%近くが機械でも，自らがサイボーグであるという事実を軽蔑した。境界が曖昧であるがゆえに，誤解と不信が大きくなった」（キム・タクァン＆チョン・ジェスン 2010：67）。

中で思考されるべき対象となっているのである。かつて宇宙空間が同様の想像力の対象となったのと同様に。

ジェンダーをめぐってはどうか。ポストヒューマンを扱うことは，必然的にジェンダーに関する思考実験を含意する。身体の限界や既存の意味を構成するコンテクストを再定義する過程において，ジェンダー観も再定義を迫られる。SF をめぐる言説が，フェミニズムと相互に交差し得るのも，多くの作品においてジェンダーが思考実験の対象として主題化されてきたからである。この点は現代韓国の SF 小説においても多様に見出される。とりわけチョン・ソヨン，キム・ボヨン，チョン・ボラ，キム・チョヨプ，チョン・ソンランといった作家たちの作品では，ジェンダーが意識的に前衛的な思考実験の対象とされていることが確認できる。既存のジェンダーをめぐる固定観念を解体する試みがなされ，そのために身体の変形・置換・消去といったポストヒューマニズム的想像力が発揮されているのである。

現代韓国 SF におけるジェンダーの再現は，「SF ジャンルが有する装置を通じて，日常化され不可視的であった父権的構造の諸形態を透過的に可視化する」というフェミニズム SF の特徴を忠実に体現している（チャン・ジョンヒ 2016：169）。この現象は，『女性作家 SF 短編選集』（2018）や『私たちが先に行ってみます』（2019）といったアンソロジーの刊行を通じて明確化され，その後も多様な背景をもつ作家たちが類似した方向性の作品を継続的に発表してきた。イ・ソヨン「ヒステリア宣言」（2013），パク・ムンヨン『地上の女たち』（2018），キム・ボヨン「どれほど似ているか」（2017），ク・ビョンモ「ミラリズム」（2018），デュナ「第二の乳母」（2019），イ・ジョンサン『カスタマー』（2017），などがその代表例である。

ジェンダーを主題化した一連の作品群の登場は，韓国における SF の意義を再考させる契機となった。しかし同時に，〈ジャンル〉そのものの意義をいかに論じ得るかという問題を新たに提起した。2000 年代以降，世界的に SF ジャンルの拡張と変容が活発に進行する状況のなかで，それを短期間に受容し，内在化し，可視化してきた韓国 SF の〈ジャンル〉としての意義は何であろうか。ジャンルの意義を論じること自体がいかなる側面で有意味であるのかという根本的な問いは，依然として未解決のままである。

3. ジャンルの向こう，現象としての SF

言説的に〈ジャンル〉とは，共通の特徴をもつナラティブの集合体である。またジャンルは，ある文化や芸術を定義する基本的な方法でもある。これはジャンルという概念が，芸術の理論化が始まった古代ギリシャに由来することからも明らかである。多様な要素で構成されるテクストの種類（Textsorte）を効果的に区別するために現れたジャンル概念は，プラトンによってディエゲーシス（diegesis）とミメーシス（mimesis）に分けられることで初めて定式化された（ラ・ヨンギュン 2017：196–200）。その後，文化・芸術作品を一定の形式に従って分類

しようとする試みは，ルネサンス期を経るなかでも続いた。しかし，既存の規定が変わらないまま新たに登場する文化・芸術形式を分類することは，ジャンルの枠に文化・芸術を図式的に当てはめる結果をも招いた。

もっとも，ジャンルという概念は時代の変化に応じて異なる意味が与えられ，その過程で従来の意味が解体・変形される。拡張と変容を繰り返すジャンルは多様な形を取ってきたが，注目すべきは，ジャンルに関わる理論のみならず，ジャンルの受容の仕方も歴史的・社会的な意味関係に強く影響されるということである。ノースロップ・フライ（Northrop Frye）が文学作品の要素を大きく四つに分類し，作品相互の共通性を見出そうとした試みは，すでに意義を失って久しい。ゆえに20世紀以降のジャンルとは，ツヴェタン・トドロフ（Tzvetan Todorov）が述べた通り，作品をめぐる議論を開始するための便宜的な出発点に留まるのかもしれない（Todorov 1972：193–201）。

それにもかかわらず，21世紀の韓国においてジャンルという用語が再び注目され，文学の形式を指し示すために用いられるようになったのは，作品の受容形態が変化し，その経験が作品の生産過程に深く関与する事態が顕著になったからである。受容者の間にとある特徴を帯びる作品に対して一定の経験が蓄積されると，それが特定のジャンルの作品創作への期待につながる。イデオロギーの時代には作品のメッセージや社会的効用が求められたが，現代においては受容者の消費志向に応える形で創作が行われるように，ジャンルをめぐる環境が変化したのである。したがって現在のジャンル概念は，単にテクストの性格を明らかにする役割に留まらず，その時代特有の状況を透視する媒体としての意義を有する。ジャンル無用論が唱えられるとしても，依然としてジャンルは形態を変えながら存続し続けると考える所以である。

このようなジャンルの意味変化の中で，SFが特別な意義を持ち得るのは，それが現代の変化と最も密接に関わる領域だからであろう。SFはまた，ジャン・ボードリヤール（Jean Baudrillard），ドナ・ハラウェイ（Donna Haraway），キャサリン・ヘイルズ（Katherine Hayles），ロージ・ブライドッティ（Rosi Braidotti）といった理論家たちの議論とも，直接的あるいは間接的に相互の影響関係を結んできた。とりわけハラウェイが描いた理論的地平はSFと緊密に交差しており，その延長線上で現代のポストヒューマニズム言説にまで影響を及ぼした（チャン・ジョンヒ 2016：29）。このように，SFが示してきた現代社会への洞察は，近代以降に展開された多様な言説を先駆的かつ予見的に捉えることから始まり，近年注目される様々な現象に対して方法論を提示し，それをナラティブに反映して具体化するという形で現れてきた。これは「作家の実証的経験による想像的オルタナティヴが主要な形式的装置」（Suvin 1979：7–8）であるSF固有の特徴にほかならない。こうした特徴は，20世紀末以降の急激な社会的変容に十分に対応できずにいる韓国の既存ナラティブにとって，代案的な役割を果たし得るものである。

韓国のSFは，21世紀に入ると大きな変革とルネサンスを迎えた。パソコン通信の時代を経

て，サイバースペースの基盤がウェブへと移行するにつれ，ウェブジンの時代が到来したのである。そして，高度に発達した通信網を基盤とするサイバースペースにおいて，コンテンツ生産も次第に拡大していった[19]。とりわけ2000年代半ばに実施された「科学技術創作文芸」の公募を通じて，自らの作家的アイデンティティをSFという単一ジャンルに限定する作家群が登場したことは，この時期の最大の成果である。彼らの活動はその後も継続し，ウェブジン時代の創作を主導するとともに，パソコン通信時代から活動してきた作家やファンダムと相まって，韓国SF百余年の歴史の中で最も顕著な隆盛を呈している。そして，この変化はSFナラティブをめぐる言説空間を拡大するための必要条件である，作家数および作品数の増加へとつながった。近年のSF関連新人公募の受賞作が，年を追うごとに個性的で多様な主題や素材を作品に反映しようと試みていることもその裏付けである。

SFは理想郷的な未来を想像・志向することに留まらず，表面化されていない現実を掘り起こし，固定化されたものを解体することで，現在とは異なる未来を想定させるジャンルである。韓国SFが百余年にわたる至難な概念形成の過程を経て，固有の慣習とエピゴネンを形成し，アイデンティティを確立し始めたことは，注目すべき成果である。今後，韓国SFが展開する思考実験は，さらに大きな意義を獲得していくであろう。

生成AIの発展に対する懸念や，人間／非人間的存在をめぐる言説は，ウィリアム・ギブスン（William Gibson），フィリップ・K・ディック（Philip K. Dick），テッド・チャン（Ted Chiang）といった数多くのSF作家によって，すでに扱われてきたテーマである。また，現代フェミニズムの言説における諸問題も，ハラウェイをはじめとするフェミニズムやポストヒューマニズムの理論家，そしてSF作家たちによって継続的に提起されてきた。とりわけ，こうした問題を先鋭的に扱ったアーシュラ・K・ル＝グウィン（Ursula K. Le Guin）の『闇の左手』（1969年）に先立ち，1965年にはすでに韓国の作家，ムン・ユンソン〔文允成〕が『完全社会』を通してジェンダー言説に対する思考実験を行っていたことは，韓国SFの興味深い一側面である。

現代のポストヒューマンをめぐる言説についても，1990年代から韓国のSF作家によるアプローチが試みられており，現在ではそのような主題や思考実験を特段意識することなく物語に内在化して適用できる作家的力量が備わっていると言える。さらにSFは，現代におけるコンテンツ消費の様態がゲーム消費に類似して展開されるなかで，ゲーミフィケーション（Gamification）の時代におけるナラティブの構築においても有用である。SFは常に現実の

19） 韓国は21世紀に入ると，世界的に発達したインターネット・インフラを基盤にウェブベースのコンテンツ環境を構築し，それを成功裏にモデル化したといえる。とりわけ既存のコンテンツ環境に対する社会的基盤が脆弱であった大衆文化，いわゆるサブカルチャー領域においてこの傾向は顕著であった。韓国においてウェブトゥーンやウェブ小説といった分野のコンテンツが媒体をウェブへと移行させる速度が比較的速かったことからも，その事実を確認することができる。

〈次〉を想像し，予見し，準備するという特質を内包している。韓国 SF が，近代への移行に際して一種のツールとして機能していたという根源的な制約を超え，現地化と内在化を経て独自の個別性を獲得したことは，時代的変化に対応する能力を備えたことを意味している。

現在を生きる我々に影響を及ぼす諸問題は，SF と決して無縁ではない。大規模言語モデルに基づく生成 AI の発展は，私たちの生活の諸相を急速に変化させつつある。先端技術が可能にする新たな革命が語られる一方で，ジュール・ヴェルヌや H.G. ウェルズが想像した深海や宇宙は，やがて日常の空間へと組み込まれるかもしれない。このような世界的変革のただ中で，SF は全く新しい物語形式であるわけではない。むしろそれは，百余年にわたり文学という形式の枠組みの中で存在し続け，主流ナラティブの意味作用に継続的に関与し，社会の発展と歩みを共にしてきた。韓国 SF のナラティブは，直面する現実への新たな洞察を可能にし，到来する未来に対する思考実験のための新たな方法論としての潜在力を有している。この潜在力の行方を検証することこそ，今後の研究課題である。

【参考文献】

〈韓国語文献〉

イ・ジヨン〔이지용〕「한국 SF 의 스토리텔링 연구〔韓国 SF におけるストーリーテリングの研究〕」，檀國大学博士学位論文，2015。

イム・ソグォン〔임석원〕「비판적 포스트휴머니즘의 기획――배타적인 인간중심주의의 극복〔批判的ポストヒューマニズムの企て――排他的な人間中心主義の克服〕」이화인문과학원編『인간과 포스트휴머니즘〔人間とポストヒューマニズム〕』ソウル：이화여자대학교출판부，2013，pp. 61–82。

キム・タクァン〔김탁환〕・チョン・ジェスン〔정재승〕『눈먼시계공〔盲いた時計職人〕』ソウル：민음사，2010。

キム・ミヨン〔김미연〕『번역된 미래와 유토피아 다시 쓰기―― 1920 년대 과학소설 번역과 수용사〔翻訳された未来とユートピアの書き換え―― 1920 年代における科学小説の翻訳と受容史〕』ソウル：소명출판，2022。

コ・ジャンウォン〔고장원〕『한국에서 과학소설은 어떻게 살아남았는가〔韓国で科学小説はいかに生き残ったか〕』ソウル：북크크，2017。

チャン・ジョンヒ〔장정희〕『SF 장르의 이해』ソウル：동인，2016。

チョ・ヒョンレ〔조형래〕「근대 한국의 과학과 문학 개념 형성과정 연구〔近代韓国における科学と文学概念の形成過程研究〕」東國大学大学院博士学位論文，2014。

ハン・ミンジュ〔한민주〕「인조인간의 출현과 근대 SF 문학의 테크노크라시―― ‘인조노동자’를 중심으로〔人造人間の出現と近代 SF 文学のテクノクラシー――「人造労働者」を中心に〕」『한국근대문학연구』第 25 号，한국근대문학회，2012，pp. 417–449。

ペ・ミョンフン〔배명훈〕『안녕，인공존재！〔こんにちは，人工存在！〕』ソウル：북하우스，2010。

ポク・ドフン〔복도훈〕「한국의 SF，장르의 발생과 정치적 무의식――복거일과 듀나의 SF 를 중심으로〔韓国の SF，そのジャンルの発生と無意識――卜鉅一とデュナの SF を中心に〕」『창작과비평』第 36 巻第 2 号，창작과비평사，2008，pp. 49–68。

ラ・ヨンギュン〔라영균〕「문학장르의 체계와 역사성〔文学ジャンルの体系と歴史性〕」『외국문학연구』

第 65 号，韓国外国語大学外国文学研究所，2017，pp. 195–212。

〈英語文献〉

Bould, Mark; Vint, Sherryl. *The Routledge concise history of science fiction*. London: Routledge, 2011（＝ソン・ギョンア〔송경아〕訳『SF 연대기—시간 여행자를 위한 SF 랜드마크〔SF 年代記——タイムトラベラーのための SF ランドマーク〕』ソウル：허블，2021）.

Hayles, Katherine. *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: University of Chicago Press, 1999（＝ホ・ジン〔허진〕訳『우리는 어떻게 포스트휴먼이 되었는가——사이버네틱스와 문학，정보 과학의 신체들〔我々はいかにポストヒューマンとなったか——サイバネティックスと文学，情報科学の身体』ソウル：플래닛，2013）.

Hume, Kathryn. *Fantasy and Mimesis: Responses to Reality in Western Literature*. New York: Methuen, 1984（＝ハン・チャンヨプ〔한창엽〕訳『환상과 미메시스〔幻想とミメーシス〕』ソウル：푸른나무，2000）.

Lewis, C. S. Ed. Walter Hooper. *Of Other Worlds: Essays and Stories*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1966.

More, Max; Vita-More, Natasha, eds. *Transhumanist Reader*. Oxford: Wilky-Blackwell, 2013.

Sawyer, Andy; Wright, Peter. *Teaching Science Fiction*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011.

Seed, David. *Science Fiction: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press, 2011.

Suvin, Darko. *Metamorphoses of Science Fiction*, New Haven: Yale University Press, 1979.

Todorov, Tzvetan. *Dictionnaire encyclopédique des science du langages*. Paris: Seuil, 1972.